
魔弾鎌士リュウレンオー～死神の魔弾戦士～

river

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔弾鎌士リユウレンオー〜死神の魔弾戦士〜

【Nコード】

N4579V

【作者名】

river

【あらすじ】

滅びかけた世界に「闇の支配者」が降り立つとき、暗黒の魔弾戦士が誕生する。

ここは滅びかけた世界。

そこに、必死で逃げる一人の男性がいた。
しかし…

「ぎゃあああああああああ！！！」

突如飛来した赤い刃が、男を真つ二つに斬り裂いた。

そしてその赤い刃の正体は、仮面ライダーネガ電王のネガデンガッシャーだった。

ネガ電王

「フフフ…これでまた一人…」

この世界の人間を滅ぼす日は近い…」

？

「ほう…面白いことをしているな…」

そこに、紫色のオーラをまとった剣を持つ、一人の男が現れた。

ネガ電王

「なんだ貴様は…？」

男

「…屑に名乗る名などない…名乗ったところですぐくたばるからな

…」

ネガ電王

「なんだと…人間ごときが！

死ねえ！！！」

「フルチャージ」

ネガ電王はネガストリームスラッシュを発動し、ネガデンガッシャーのオーラソードを飛ばして男に斬りかかった。
しかしその男は、手にした剣「蛇之麿正^{オロチノアラマサ}」で、ネガデンガッシャーのオーラソードをいともたやすく破壊した。

ネガ電王

「馬鹿な…!？」

男

「…消え失せろ…雑魚が。」

男はネガ電王に急接近し、オーラが強まった蛇之麿正でネガ電王を袈裟斬りにし、ネガ電王は爆発した。

ネガ電王

「ぐわああああああ!？」

男は蛇之麿正を肩に担ぎ、先程までネガ電王がいた場所を一瞥する。

男

「…この程度で世界を滅ぼすなど…笑わせる。
所詮他もこの程度だろうな…つまらん。」

男の名は、ダークカモン。

「三剣士の世界」の裏側に存在する「暗黒世界」の主であり、闇の力を自由自在に操る「闇の支配者」である。

そして、川口剣汰の宿敵であり、その実力は先程の通り、生身で仮面ライダーを圧倒するほどである。

春日

「ダークカモン様ー！」

ダークカモンに駆け寄ってきた女性は、ご存じ桜井春日。

彼女はダークカモンの部下であり、なおかつダークカモンの恋人を自称している。

春日

「お見事でした、ダークカモン様。」

ダークカモン

「…この程度、暇つぶしにもならん。
命を奪うのは随分と久しいがな…」

春日

「あんなやつ、やられて当然ですよ！」

ダークカモン

「時空の穴が開かないということは、まだいるはずだ。
とつと探し出して片づけて、とつと戻るぞ。」

春日

「はい！」

時空の穴とは、別世界の「意志」が「三剣士の世界」の人物を必要としたときにその人物の目の前に現れ、必要とした別世界に飛ばしてしまふ、ワームホールのようなものであり、飛ばされた先で「為すべき事」を達成すると、再び時空の穴が開き、元の世界に戻ることができる。

そして今、ダークカモンと春日は、その時空の穴に吸い込まれ、この滅びかけた世界に飛ばされていた。

この世界は、先程のネガ電王のような闇の戦士が支配する世界で、

この世界では人間は蹂躪され、抹殺される。
知っている人のために説明しておくが、この世界はかつてダークデ
イケイドが訪れた世界とは別の世界である。

春日

「この世界に、まだ生き残りはいるのでしょうか…」

ダークカモン

「…いれば好都合だがな…」

春日

「どういことですか？」

ダークカモン

「そいつらを餌にすれば、屑どもが集^{たか}ってくるだろうからな…
早く終わらせられる…」

春日

「だ、駄目ですよそんなの！」

せつかく生き残ってきた人たちをみすみす危険にさらすなんて…

！」

ダークカモン

「お前が確実に守ればいい。」

それができる力が、今のお前にはあるだろう。」

春日

「そ、それは…そうですね…」

ちなみに「それができる力」とは、春日が変身するリュウジョウオ
ーのセイントフィールドのことである。

？

「…面白いことを考えるな、お前。」

ダークカモンと春日は声のした方を向くと、そこには黒衣の少女が

立っていた。

ダークカモン

「…誰だ。」

少女

「お前に興味を持った者、とでも名乗っておこう。」

すると少女は、刃の付け根の裏側にクリスタルが付いた大鎌を出現させ、構えた。

少女

「試させてもらう。」

そう言つて、少女はダークカモンに斬りかかった。しかしダークカモンは、蛇之庵正でそれを防いだ。

春日

「ダークカモン様!？」

ダークカモン

「…下がってる春日、邪魔になる。」

春日

「は、はい!」

春日がその場を離れると、ダークカモンは少女を大鎌ごと弾き飛ばした。

しかし少女は、問題なく着地した。

ダークカモン

「この俺を試すだとい…?」

随分偉そうなことを言ってくれるな、ガキが。」

少女

「実力はさつきネガ電王を倒したことで推測はできる…が、やはり実感したいのでな。」

ダークカモン

「…いいだろう、ちょうど良い暇つぶしになりそうだ。」

ダークカモンと少女は互いにダッシュで接近し、それぞれの獲物をぶつけ合う。

少女とダークカモンでは明らかな体格差があるが、少女はそれを全く問題とせず、ダークカモンと渡り合っていた。

春日

「何なのあの子…」

ダークカモン様と渡り合うなんて…いったい何者なの…？」

しかし、春日は気づいていた。

ダークカモンは、本気などこれっぽっちも出していないことに。そしてそれは、少女も同様だった。

少女

「やはり私などでは、力を出すには及ばぬか？」
ダークカモン

「…当たり前だ、調子に乗るなガキが。」

だが…ウォーミングアップにはちょうど良い。」

少女

「それは光栄だ。」

すると、少女の大鎌が90度上に変形し、大型の薙刀のような形態になった。

少女

「はあっ!!」

少女は武器を振るうが、ダークカモンはそれを難なくかわす。

ダークカモン

「…面白いギミックだな。」

少女

「欲しいか？」

ダークカモン

「ほざけ。」

ダークカモンは蛇之麿正を地面に叩き付け、闇の衝撃波を放った。

少女

「ようやく力を使ってくれたな…!!」

少女は高く跳躍して、衝撃波をかわす。

ダークカモン

「…馬鹿が。」

ダークカモンは空中の少女目掛け、手からシャドーボールを放ち、命中した。

少女

「ぐあああっ!?!」

春日

「あ、危ない!」

少女は受け身を取ることなく落下していき、あわや地面に激突する
かと思われたが、間一髪のところまで春日が助けた。

ダークカモン

「よくやった。」

春日

「はい、ありがとうございます。」

少女

「私の負けだな。」

ダークカモン

「お前もだ。」

少女

「...どういうことだ？」

ダークカモン

「...本当に、ちょうどいい暇つぶしになった。」

その言葉にまさかと思い、春日が周囲を見渡すと、ダークリュウケ
ンドー、ブラックライオ、仮面ライダーダークカブト、仮面ライダ
ーダークキバに包囲されていた。

ダークリュウケンドー

「貴様が、ネガ電王を倒したのは。」

ダークカモン

「...だったら何だ。」

ブラックライオ

「貴様ら全員、抹殺してくれる！」

春日

「悪いけど、そうやすやすとやられる気はないよ！」

セイリュウジョウ！リュウジョウキー、発動！」

セイリュウジョウ

「チェンジ、リュウジヨウオー。」

春日

「聖龍変身！」

春日はリュウジヨウオーに変身した。

リュウジヨウオー

「聖龍の、黒き魔弾術士…リュウジヨウオー、ライジン！！」

リュウジヨウオーはセイリュウジヨウをハルバードモードに変形させて、闇の戦士たちを見据える。

ダークカモンも蛇之庵正を肩に乗せ、敵を睨み付ける。

少女は薙刀を大鎌に戻し、構える。

闇の戦士たちも、それぞれの武器を構える。

ダークリュウケンダー

「メイリュウレン、今戻れば今まで通りで済ませてやるぞ？」

少女

「……………」

ダークカモン

「…「メイリュウレン」、それがお前の名か。」

メイリュウレン

「…そうだ。」

ダークカモン

「…なるほどな。」

お前、魔弾龍か。」

メイリュウレン

「…ご名答だ。」

リュウジヨウオー

「それじゃあ、あいつらは私たちの外に、あなたも狙ってるの？」

メイリュウレン

「…ああ、私が人間の手に渡れば、こいつらを倒し、この世界を救う力となる。」

奴らはそれを阻止するために、私を監禁し、人間を抹殺しているんだ。」

リュウジョウオー

「そんな…許せない…！」

ダークリュウケンドー

「メイリュウレン、もう一度だけ言っ

戻ってこい。」

メイリュウレン

「…愚問だ。」

ダークリュウケンドー

「そうか…ならば、お前ごと皆殺しにしてくれる…！」

ダークカモン

「…ほざけ雑魚共。」

死ぬのはてめえらだ。」

その言葉を皮切りに、メイリュウレンはダークリュウケンドーへ、リュウジョウオーはブラックライオへ、ダークカモンはダークカプトとダークキバへ戦いを仕掛けた。

ブラックライオはブラックライオブレイカーでリュウジョウオーに斬りかかり、リュウジョウオーはセイリュウジョウハルバードモードで対抗する。

ブラックライオ

「喰らえ！」

リュウジョウオー

「甘いよ！」

セイリュウジョウでブラックライオブレイカーを受け流し、ブラックライオを斬りつける。

ブラックライオ

「ぐわあああああ！？」

おのれ…！」

ブラックライオは、必殺のブラックライオファイヤーを放つ。

リュウジョウオー

「悪いけど、当たらないよ！」

リュウジョウオーは跳躍して、ブラックライオファイヤーを飛び越えた。

ブラックライオ

「何だと！？」

リュウジョウオー

「ファイナルキー、発動！」

セイリュウジョウ

「ファイナルクラッシュ。」

リュウジョウオー

「斬り裂け…！龍星斬…！」

炎のような魔力光を纏ったセイリュウジョウで、ブラックライオを一刀両断し、ブラックライオは爆発した。

ブラックライオ

「ぐわああああああ！？」

リュウジヨウオー
「よし！楽勝♪」

一方のダークカモンは、やはりダークカブトとダークキバを圧倒していた。

ダークカブト

「はあああああああつ！！」

ダークカモン

「…フン。」

ダークカモンは闇の波動を放ち、ダークカブトを吹き飛ばす。

ダークカブト

「ぐあああああああ！？」

ダークキバ

「隙あり！」

ダークキバが殴りかかる。

ダークカモン

「…わざとに決まってるだろ、屑野郎。」

ダークカモンは蛇之窟正から闇の光線を放ち、ダークキバを返り討ちにした。

ダークカブト

「くそっ！クロックアップ！！」

「クロツクアップ」

ダークカブトは超高速の世界に入り、ダークカモンにゼクトクナイガンで斬りかかる。

ダークカモン

「丸見えなんだよ、雑魚が。」

ダークカモンはダークカブトを一瞬で斬り裂き、ダークカブトは爆発した。

ダークカブト

「うわあああああああ!？」

ダークキバ

「こいつ…強すぎる!！」

ダークカモン

「身の程を知れ、ゴミが。」

ダークカモンは蛇之庵正でダークキバを一刀両断すると同時に闇の衝撃波を放ち、ダークキバは消し飛んだ。

ダークキバ

「ぐあああああああ!？」

メイリュウレンは大鎌でダークリュウケンドーに対抗していたが、押されていた。

ダークリュウケンドー

「どうした、そんなものか？」

メイリュウレン

「そんなわけ…ないだろう！」

メイリュウレンは大鎌で斬りかかるが、ダークリュウケンドーは盾で防ぎ、大鎌をダークゲキリュウケンで弾くと、メイリュウレンを蹴り飛ばした。

メイリュウレン

「ぐはっ…！？」

メイリュウレンは地面を転がり、そこにリュウジョウオーが駆け寄る。

リュウジョウオー

「大丈夫！？」

メイリュウレン

「ぐうつ…やはり…私では…あいつには…」

ダークリュウケンドー

「いい加減観念したらどうだ？」

お前に勝ち目などない。」

ダークカモン

「…随分と余裕だな。」

後はてめえだけなんだが。」

ダークカモンが蛇之庵正を肩に乗せながら、ダークリュウケンドーを見下した目で見据える。

ダークリュウケンドー

「それで勝ったつもりか、甘いな。

リバースキー、発動！」

ダークゲキリュウケン

「ダークリバース！」

ダークゲキリュウケンから黒い光球が放たれると、倒されたはずのネガ電王、ダークカブト、ダークキバ、ブラックライオが出現した。

リュウジヨウオー

「そんな……！？」

ダークリュウケンドー

「俺がいる限り、こいつらは何度でも復活する……！」

ダークカモン

「……なら、てめえを潰せばいいだけだ。

春日、時間を稼げ。」

リュウジヨウオー

「はい！」

フィールドキー、発動！」

セイリュウジヨウ

「セイントフィールド。」

リュウジヨウオー

「セイントフィールド、展開……！」

リュウジヨウオーがセイリュウジヨウで地面を突くと、リュウジヨウオーの足元に魔法陣が現れ、その周囲から光の壁が伸びた。

ダークリュウケンドー

「まさか……！？

させるか……！」

ネガ電王がネガデンガツシャーガンモードで、ダークカブトがゼクトクナイガンで銃撃する。

リュウジヨウオー

「セイントフィールド！リフレクト！」

リュウジヨウオーがそう言うと、光の壁に直撃した弾丸は跳ね返され、ネガ電王とダークカブトに命中した。

ネガ電王・ダークカブト

「ぐあああああああ！？」

ダークカモンはメイリュウレンに近づくと、見下ろしたまま話しかけた。

ダークカモン

「…人間がお前を手にすれば、奴らを倒せる、そう言ったな。」

メイリュウレン

「ああ…」

ダークカモン

「なら…」

ダークカモンはしゃがみこみ、メイリュウレンの手を取った。

ダークカモン

「今からお前は、俺の僕だ。」

常に俺に従え。」

メイリュウレンは突然の言葉に数秒呆けていたが、我に帰ると、

メイリュウレン
「…わかった。」

ダークカモンの言葉の意味を理解し、その上で承諾した。

ダークカモン

「…最初の命令だ。」

お前の力、俺によこせ。」

メイリュウレン

「承知した、主。」

そう言って目を瞑と、メイリュウレンの体が光に包まれて形を変えていき、メイリュウレンが武器としていた大鎌のクリスタル部分に龍の顔が付いた、大鎌型の魔弾龍「メイリュウレン冥龍鎌」になった。

（ただし今は、刃が90度下に折りたたまれた、斧型の変身待機状態になっている。）

そしてメイリュウレンの龍の顔を上にスライドさせると、ダークカモンの目の前に魔弾キーが現れ、それを手に取る。

ダークカモン

「リュウレンキー、発動…」

メイリュウレン

「チェンジ、リュウレンオー。」

メイリュウレンが喋ると共に、折りたたまれていた刃が90度展開し、基本形態「サイズモード」となる。

ダークカモン

「冥龍変身…」

ダークカモンはメイリュウレンを数回目の前で回した後、右手に持って高く掲げた。

するとメイリュウレンから黒い光の龍が現れて空を舞い咆哮した後ダークカモンに突入し、ダークカモンの姿が一瞬で変わった。

リュウレンオー

「冥龍の黒き、死神の魔弾鎌士…リュウレンオー、ライジン…！」

ここに、暗黒の魔弾戦士が誕生した。

ダークリュウケンドー

「リュウレンオー…だと…！？」

リュウジョウオー

「ダークカモン様も…魔弾戦士に…！」

ダークリュウケンドー

「小賢しい！やれ…！」

ダークリュウケンドーの命令で、ダークカブトとダークキバがリュウレンオーに襲い掛かる。

リュウレンオー

「…生身の俺にすら勝てねえくせに…」

言いつつ、ダークカモンは仮面の下で目を瞑り、

リュウレンオー

「今の俺に勝てるわけねえだろうが、ゴミ共。」

そういうと同時に目を見開くと、メイリュウレンでダークカブトとダークキバをすれ違いざまに斬りつけた。

その斬撃は的確に二人のベルトを斬り裂いており、二人は断末魔と共に爆発した。

ダークカブト・ダークキバ

「ぐあああああああああ！？」

ネガ電王

「おのれ…！」

ネガ電王はネガデンライナーを呼び寄せて乗り込み、ネガデンライナーからギガンテスを出現させる。

リュウジョウオー

「メイリュウレン、ハルバードモード。」

リュウレンオーはメイリュウレンを横に振って刃を90度上に変形させ、大型の薙刀のような形態、「ハルバードモード」に変形させた。

リュウジョウオー

「ハルバードモード…私と同じ…！！」

セイリュウジョウ

「…春日、同じなのは春日じゃなくて、私とメイリュウレン。」

リュウジョウオー

「はあああああ…／／／」

セイリュウジョウ

「…春日、聞こえてる？」

メイリュウレン

「お前の主は、よほど我が主が好きなようだな。」

セイリュウジョウ

「…うん、どうしようもないくらい。」

メイリュウレン

「フツ…羨ましいものだ。」

セイリュウジョウ

「…あなたも、恋、してみたい？」

メイリュウレン

「今の私は主の力。

必要ないさ。」

セイリュウジョウ

「…そう。」

リュウレンオー

「…惚気話は済んだか？

春日、飛べ。」

リュウジョウオー

「あ、はい！」

レイダーキー、召喚！」

セイリュウジョウ

「セイントレイダー。」

リュウジョウオー

「出でよ、セイントレイダー！」

リュウジョウオーは、蝙蝠型の獣王、セイントレイダーを召喚した。そしてリュウジョウオーが高く跳躍すると、セイントレイダーはウイングモード・セイントウイングに変形し、リュウジョウオーの背中に合体した。

SWリュウジョウオー

「セイントウイングリュウジョウオー、ライジン！」

セイントウイングリュウジョウオーが飛び立つのを見ると、リュウレンオーはメイリュウレンの龍の顔を上にスライドさせ、魔弾キー

ホルダーから魔弾キーを取り出す。

リュウレンオー

「ファルコンキー、召喚……」

メイリュウレン

「デスファルコン。」

リュウレンオー

「出でよ、デスファルコン……！」

リュウレンオーは、ハヤブサ型の獣王、デスファルコンを召喚した。そしてリュウレンオーが高く跳躍すると、デスファルコンはウイングモード・デスウイングに変形し、リュウレンオーの背中に合体した。

DWリュウレンオー

「デスウイングリュウレンオー……ライジン……！」

SWリュウジョウオーとDWリュウレンオーは飛行し、ネガデンライナーを見据える。

ネガ電王

「蹴散らしてやる……！」

ネガデンライナーの一号車がネガゴウカノンを、2号車のギガンテスハデスが火球を放つ。

しかしSWリュウジョウオーとDWリュウレンオーはそれをかわして、ネガデンライナーに接近する。

それに対し、3号車のギガンテスヘルが鎖鉄球型の爆弾を投擲し、4号車のギガンテスヘブンが弾丸針を連射するが、それもすべて避けられる。

ネガ電王

「小癪な…！」

DWリユウレンオー

「…こいつと遊んでもつまらんな…」

春日、とつと墜とすぞ。」

SWリユウジョウオー

「はい！」

そしてSWリユウジョウオーは、ネガデンライナーをSWリユウレンオーと挟む位置に移動する。

SWリユウジョウオー

「ファイナルキー、発動！」

DWリユウレンオー

「ファイナルキー、発動…！」

セイリユウジョウ・メイリユウレン

「ファイナルクラッシュ。」

SWリユウジョウオー

「魔弾龍、獣王、術士…！」

DWリユウレンオー

「魔弾龍、獣王、錬士…！」

SWリユウジョウオー・DWリユウレンオー

「…三つの力が、今一つになる…！三位一体…！」

SWリユウジョウオー

「斬り裂け…！龍星斬…！」

DWリユウレンオー

「メイリユウレン…煉獄斬…！」

炎のごとき魔力を纏ったSWリユウジョウオーと、暗黒の魔力を纏

ったDWリュウレンオーが、両側から同時にネガデンライナーを貫通し、ネガデンライナーは大爆発して、ネガ電王ごと消滅した。そしてリュウレンオーはデスファルコンとの合体を解除し、重力に身を任せて落下し、ダークリュウケンドーの前に着地する。

ダークリュウケンドー

「ちっ…だが無駄なことだ！」

ダークリュウケンドーは、再びリバーズキーを取り出す。

リュウレンオー

「…させるわけねえだろ。」

リュウレンオーはメイリュウレンで右下から斬り上げ、黒い斬撃を放ち、ダークリュウケンドーを吹き飛ばした。

ダークリュウケンドー

「ぐわあああああ！？」

リュウレンオーはメイリュウレンをサイズモードに戻すと、ダークリュウケンドーに向かって走り出し、メイリュウレンで斬りかかる。ダークリュウケンドーはダークゲキリュウケンの盾で防ごうとするが、あまりの威力の高さにのけぞってしまう。

そこへすかさずリュウレンオーが追撃をかけ、ダークリュウケンドーは次々と斬りつけられる。

そしてとどめとばかりに、斬り裂かれると同時に再び黒い斬撃で吹き飛ばされた。

ダークリュウケンドー

「ぐわあああああああ！？」

ぐっ…何故だ！？それほどまでの暗黒の力を有しておきながら、なぜ人間に味方する！？」

リュウレンオー

「闇ゆえに悪、そんな考えはもはや古い。」

ダークリュウケンドー

「何だと…？」

リュウレンオー

「たとえ圧倒的な光の力でも、使用者次第では、人間を根絶させられる殺戮兵器になる。」

そして絶対的な暗黒の力でも、使用者次第では、人類を、世界を救う希望となる。

…そして俺は、気まぐれの延長線上で後者になっただけだ。」

ダークリュウケンドー

「気まぐれで人間を救うだと…！？

馬鹿げたことを…！」

リュウレンオー

「滅ぼす側のでめえがそれを言うか…

そっちのほうがよくほど馬鹿げてるな…」

ダークリュウケンドー

「…認めん…貴様のような奴が闇の戦士など…！」

ファイナルキー、発動…！」

ダークゲキリュウケン

「ファイナルクラッシュ！」

ダークリュウケンドー

「龍王！暗黒魔弾斬り…！」

ダークリュウケンドーが、黒い竜の姿をした斬撃を放った。

リュウレンオー

「…てめえなんざに認められる筋合いは…ねえよ。」

リュウレンオーは、竜王暗黒魔弾斬りを、メイリュウレンでいとも簡単に斬り裂き、打ち消した。

ダークリュウケンドー

「そんな…馬鹿な…」

リュウレンオーは、ゆっくりとメイリュウレンを地面に立てる。

リュウレンオー

「…ダークリュウケンドー…ゴッドリュウケンドーが闇に墜ちた姿、か…」

…剣汰、もしこの姿になってみる…

その時は…こいつでてめえを…ぶち殺す。」

そういつて、リュウレンオーは魔弾キーを取り出す。

リュウレンオー

「ファイナルキー、発動…」

メイリュウレン

「ファイナルクラッシュ。」

リュウレンオー

「メイリュウレン…斬命…！」

リュウレンオーは、その場でダークリュウケンドーに向かって袈裟斬りを繰り出した。

その瞬間、ダークリュウケンドーは一瞬痙攣すると、崩れるように倒れた。

リュウレンオー

「…永劫の闇に消え失せる。」

リュウレンオーが言い放つと、ダークリュウケンドーは黒い霧のよう
に消滅した。

そしてリュウレンオーは変身を解き、ダークカモンの姿に戻った。

そこへ、同様に変身を解いた春日が駆け寄る。

春日

「ダークカモン様、今の技はいつたい…？」

メイリュウレン

「…「斬命」は、読んで字のごとく…相手の「命」そのものを斬り
裂き、一撃かつ一瞬で死に至らしめる技だ。」

春日

「命を…！？」

メイリュウレン

「そしてこの技は、相手が視界にさえ入っていれば、相手がどこに
いようと届き、相手の防御は一切無視される。」

すなわち…この技を発動したが最後、標的を待つのは…「死」だ
けだ。」

セイリュウジョウ

「…あなたに見合う、凶悪な技だね。」

メイリュウレン

「そうだな…」

そのとき、ダークカモン達の前に、ブラックホールのようなものが
出現した。

ダークカモン

「…時空の穴が開いたか。」

春日

「ということとは…この世界を、救えたんですね！」

セイリユウジヨウ

「…結果的に、そうなる。」

ダークカモン

「…この世界にもう用はない。」

とつとと帰るぞ、春日、セイリユウジヨウ、メイリユウレン。」

春日

「はい!!」

セイリユウジヨウ

「…うん。」

メイリユウレン

「承知した、主。」

セイリユウジヨウは腕輪型のモバイルモードとなつて春日の右手首に収まり、メイリユウレンも同じく腕輪型のモバイルモードとなつて、ダークカモンの右手首に収まった。

春日

「位置まで私と同じ…!!」

セイリユウジヨウ

「…幸せ者だね、春日は。」

メイリユウレン

「みたいだな。」

ダークカモン

「…なら、ついでに褒美でもやるか。」

春日

「…へ？」

ダークカモンは春日の顎をつまんで上を向かせると、春日の唇に口づけした。

春日

「!?!?!?!」

セイリュウジョウ

「わーお。」

メイリュウレン

「なかなか大胆だな、主。」

そして、ダークカモンは唇を離すと、

ダークカモン

「行くぞ。」

そう言つて、時空の穴へ向け歩き出す。

春日もはつと我に帰ると、

春日

「ま、待ってください、ダークカモン様〜!」

そう言いながらダークカモンの横に並び、ともに時空の穴に入っていった。

（後書き）

というわけで、第七の魔弾戦士の誕生です。

剣、銃、斧、槍、刀、杖ときたら、何が残ってるかな…と考えていたら、「そうだ鎌あるじゃん」となり、リュウレンオーを思いつきました。

なお、変身者であるダークカモンが元から剣汰と同等以上の実力であるため、リュウレンオーは一部チートです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4579v/>

魔弾鎌士リュウレンオー～死神の魔弾戦士～

2011年10月7日09時35分発行